

# 多肢選択肢の提示法が選択行動に及ぼす効果

Effect of presentation method of alternatives on multiple choice behavior

○ 今関 仁智・小野 浩一

Masatoshi IMASEKI and Koichi ONO

(駒澤大学大学院人文科学研究科・駒澤大学文学部)

Komazawa University

key words: choice, sequential presentation, delay

## 目的

選択肢が1つの強制選択場面と選択肢が複数の自由選択場面の選択において、同一の結果がもたらされる場合には、自由選択場面への選好が一貫して示されてきた(今関・小野,2006; 坂上・牧瀬,1998)。本実験では、選択肢が1個の強制選択場面と、5個の自由選択場面間の選択において、自由選択場面の選択肢を留保型と消滅型という2種類の方法で継時提示し、提示方法が選択場面間の選好に与える効果を検討した。また、強制選択場面では1個の選択肢を遅延なしで提示するのに対し、自由選択場面では遅延なし・遅延ありの2つの遅延条件を設定し、選好に対する効果を合わせて検討した。

## 方法

**実験参加者** 大学生18名(男性10名、女性8名)。平均年齢は20.8歳(18~39歳)。

**装置・材料** ノート型PCのモニターを選択肢表示画面とし、表示された各選択肢へのマウスクリックを選択反応とした。プログラムはVisual Basic 2005で作成した。

**手続き** 100、200、300、400、500、600、700、800、900、1000の10種類の得点ボタンを選択肢とし、強制選択場面ではこのうちのいずれかの得点ボタンが1個、自由選択場面では10種類のうち5個が任意に提示された。試行全体を通して両選択場面の期待値が等しくなるように調整した。

試行では強制と自由の選択場面を並列提示した。強制選択場面では「1個」、自由選択場面では留保型が「5個残る」、消滅型は「5個残らない」と書かれたボタンを表示した。「1個」をクリックした場合は、得点ボタンを遅延なしで提示した。「5個残る」をクリックすると、1個目の得点ボタンを提示し、同時に「次を見る」と書かれたボタンを提示した。実験参加者は1個目の得点ボタンを選択するか、「次を見る」をクリックして、新たな得点ボタンを提示するかどうかを選択した。留保型は「次を見る」をクリックすると、得点ボタンが順次増加し、最大5個の得点ボタンが提示された。「5個残らない」をクリックした場合も1個目の得点ボタンが提示されるまでは同様だが、「次を見る」をクリックして、新たな得点ボタンが提示されると、前に提示された得点ボタンは消失し、常に1個だけが表示された。得点は得点ボタンのクリックで獲得され、試行の度に累積された。

また、以上の提示方法2条件に加え、選択肢提示において得点ボタンが即時提示される遅延なし条件(60試行)、1個あたり15秒の遅延がある遅延あり条件(60試行)を実施した。従って、遅延なし条件(留保・消滅を各30試行)と遅延あり条

件(留保・消滅を各30試行)を全実験参加者に実施した。両遅延条件において、留保型と消滅型の2つの提示方法が2試行以上連続しないようにランダムで実施した。実験は、遅延なし条件から実施する場合と、遅延あり条件から実施する場合とで、カウンターバランスをとった。

## 結果

図1は各条件における自由選択場面に対する選好である。縦軸は各条件(30試行)において自由選択を選択した回数(平均値)、横軸が提示条件、◆が遅延なし条件、□が遅延あり条件を示している。

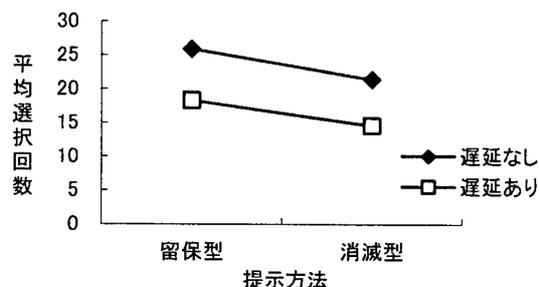


図1. 各条件における自由選択場面に対する選好

図1から全体として自由選択場面に対する選好が優勢だが、提示条件別に見ると消滅型より留保型が、遅延あり条件より遅延なし条件が、平均選択回数が多かった。2×2の分散分析の結果、提示方法では有意な差が認められず( $F=3.49, df=1, 68, p>.05$ )、遅延条件のみ1%水準で有意差が認められた( $F=10.78, df=1, 68, p<.01$ )。また、交互作用は認められなかった。

## 考察

本実験の結果、遅延がない状況では自由選択場面に対する選好が強く認められた。しかし、提示方法の違いによる選好の差は認められなかった。これは、同時提示と継時提示との間に選好の差が認められた今関・小野(2006)と比較して、本実験は提示方法間の違いが選好に与える効果が小さかったのではないかと考えられる。今後は、提示方法及び選択肢の数や得点の大きさ等も再検討し、実験状況を構成する必要があるだろう。

## 引用文献

今関仁智 小野浩一 2006 ヒトにおける強制選択場面と自由選択場面の選好 — 遅延および提示法の効果 — 日本行動分析学会第24回年次大会発表論文集 p.117

坂上貴之 牧瀬隆之 1998 選択肢の多さは好まれるのか 慶應義塾大学社会科学研究紀要, 47, 17-26